

2020年はCovid-19パンデミックにより激動の年となりました。「未曾有」という形容が少しも大げさでない、そんな状況に我々は置かれました。これまでの日常は失われ、誰しもが多かれ少なかれ変化することを強いられたと思います。不自由が溢れる中で、自分にとって本当に必要なこと、大切なことが何かを考えた人は多かったのではないのでしょうか。うまく事が流れているときには忘れがちな、自分を見つめなおす作業を行うきっかけになったのなら、この未曾有の禍を経験したことはデメリットばかりではないと、前向きに捉えたいものです。

さて、大学教育においても昨今、「パラダイムシフト」が求められています。社会が求める人材像の変化に順応し、また、今の学生に合った教育を提供するために、各々の大学で改革に向けた取り組みが行われていることと思います。第23・24合併号となった本誌には、本学の教育改革への取り組みのなかで行われた本学教員を対象としたディプロマ・ポリシーに関する意識調査の報告が掲載されています。本学の教職員ひとりひとりが現状を認識し改革に取り組むための重要な情報となっています。また、本誌には、発達障害児を持つ家族に目を向けた文献研究の報告も掲載されています。発達障害を持つ子供の数は年々増加しており、障害を持つ子供だけでなく養育する家族に対するサポートの必要性が示されています。いずれの報告も大変興味深い内容となっていますので、是非多くの方に読んでいただきたいです。

さらに、本誌には2つの記事が掲載されています。1つは、明治国際医療大学構内に設置された気象観測装置の40年間の測定記録です。本学教員であった森本安夫先生から岡田薫先生に引き継がれ集積された大変貴重な記録です。多くの学生たちを見守り育んできた日吉の地の美しい自然や空気を感じつつ、また百葉箱に足しげく通われるお二人の先生の姿を思い出しつつ、データを眺めていただけたらと思います。もう1つの記事は、本学研究委員会が本学における研究推進、特に若手研究者の育成を目的として取り組んでいる「学内研究助成」の2019年度の成果報告集です。時間も研究費も限られた状況の中で、知的好奇心を失わず真理を追究しようと頑張っていますので、是非ご一読ください。

最後に、この感染症流行が一日も早く終息し、全ての者が安心して過ごせる日が来ることを祈っています。

明治国際医療大学誌編集委員会
委員長 糸井マナミ